

平成28年度における学長表彰対象者について

【学長表彰】

| 候補者(団体)                                       | 団体 | 人数 | 所属・職名等                  | 功績概要   |
|---|----|----|-------------------------|--|
| 大学院医学研究科<br>神経内科学／分子脳科学<br>のグループ<br>代表者:戸田 達史 | ○  | 4  | 医学研究科<br>教授ほか3名の教員      | <p>戸田教授のグループは、筋ジストロフィーの原因になる遺伝子の発見から、病気のメカニズムの解明、治療法の開発を一貫して実施し、顕著な成果を挙げた。最近では、福山型筋ジストロフィーおよび類縁疾患の原因と治療法を世界に先駆けて解明し、本学の国際的な学術評価を著しく高めた。</p> <p>福山型筋ジストロフィーは日本に多い筋ジストロフィーで、1960年に福山幸夫博士によって発見され、1998年、戸田教授は小林准教授らと病気の原因となる遺伝子を見出し、フクチンと名付けた。2011年には遺伝子変異が引き起こすスプライシング異常を見つけ、それを是正する治療薬を開発した。フクチンの機能は長年の間不明だったが、2016年、フクチンをはじめとした筋ジストロフィー遺伝子が、リビトールリン酸という哺乳類では存在が知られていなかった糖アルコールを作り出す酵素であることを発見し、病気の発見から56年、フクチン遺伝子の発見から18年かけて、そのメカニズムが明らかになった。また、学術的にも、リビトールリン酸の発見は、Essential Glycobiologyの改訂版に記載されることが決定され、教科書を書き換えるほどのインパクトをのこした。</p> <p>2016年の論文出版時には、新聞やテレビニュースで報道され、積年の研究成果については日経バイオでも個別に紹介され、今後の医療研究のあり方に一石を投じることとなり、神戸大学の名声を高めた。また、国際的にも筋ジストロフィーの患者団体などから問い合わせがあり、代表者との個別会談などが企画されており、今後、関連疾患の国際的研究拠点としての発展が強く期待される。</p> <p>また、朝日賞、文部科学大臣表彰賞、時実利彦記念賞、日本生化学会奨励賞、日本糖質学会奨励賞など、多くの賞を受賞し、外部研究資金獲得についても、AMEDやCREST、新学術領域計画研究などの大型予算をはじめ、この数年間継続して、学内トップクラスの獲得状況をほこる。若手育成にも注力しており、小林准教授、金川講師も若手研究A、基盤Bと連続して採択されており、グループとしての獲得状況は学内有数である。更に、戸田教授は臨床活動にも精力的で、神戸大発の筋ジストロフィー治療薬の開発を企業と共同で実施していることに加え、福山型筋ジストロフィー患者が国内各地から戸田外来に集まっており、臨床の場においても、神戸大学が筋ジストロフィーの中心地であることを広く認知させた実績をもっている。</p> <p>以上のように、戸田教授らの活動は研究のみならず社会的にも顕著な功績であり、本学の学術的評価を著しく高めたものである。</p> |
| 分解性デバイス医工連携<br>開発チーム<br>代表者:福本 巧              | ○  | 3  | 医学研究科<br>准教授ほか2名の教員     | <p>この医工連携開発チームでは医学研究科 肝胆膵外科学分野と工学研究科 材料物性学研究分野が協力し、外科手術に安全に使用でき、一定期間が経過した後に分解され、体外に排出される吸収性金属クリップの開発に成功した。このクリップはマグネシウムに生体内必須元素であるカルシウムや亜鉛を添加しているため、高い生体適合性を有している。その内部結晶組織を改良することで、必要とされる締結力や成形性を獲得しており、いままで実現できなかった従来のチタン性クリップからの完全な置換が可能となる。胸腹部の通常手術や鏡視下手術における胆管や血管閉鎖に使用する。現在、小動物および大動物による安全性および性能試験を終了し、前臨床試験の準備中で、3年以内の臨床試験実施が見込まれる。この吸収性クリップが実用化されると非吸収性クリップが永久に体内へ残存することで生じる迷入や感染症などの術後合併症の低減が可能となる。また術後のCT,MRI撮影では従来の金属クリップに不可避であったアーチファクトをほとんど生じないことから画像診断の精度が向上する。今回開発したマグネシウム合金は外科用クリップのほか、手術用自動吻合器のステープラー等にも応用可能で、日本発の新たな医療機器開発のキーデバイスとしての役割が期待されている。</p> <p>チームリーダーの福本准教授は吸収性金属クリップ以外にも医工連携研究を積極的に推進しており、粒子線の適応拡大を可能とする体内空間可変粒子線治療およびその治療に用いる分解性デバイスである吸収性スプーサーの開発、高度進行肝癌を治療可能な経皮的肝灌流化学療法およびその治療に用いる4ルーメン2バルーンカテーテルの開発に成功している。両治療法ともすでに臨床実施されており、神戸大学発の独自の先進的治療技術として認知されている。</p> <p>以上のように、医工連携開発チームは非常に独創的で社会実装が可能な研究開発を推進している。このことから神戸大学に対する多大な貢献が認められるものである。</p>  |
| 国際広報活動推進チーム<br>代表者:安野 恵理                      | ○  | 9  | 国際部国際企画課<br>事務員ほか8名の職員  | <p>【グローバル活動に貢献】</p> <p>国際部国際企画課と総務部広報課は互いに連携し、国際広報の充実を図ることで、神戸大学の国際的なプレゼンス向上を目指している。また、附属小学校でも神戸大学の新たな展開へのパイオニアとしての取り組みが進んでおり、グローバル活動に多大な貢献が認められるものである。</p> <p>国際広報活動推進チームはまず学長プロジェクトとして国際広報ワーキンググループを設置し、その下部組織として国際企画課、広報課を中心とした英語サイトコンテンツ分科会を設置し、コンテンツの再構築を検討した。新しい英語サイトは、国外に滞在している研究者や本学への留学希望者等の利用者の利便性を意識した内容に仕上げるため、ペルソナ法を活用することにより、ターゲットとしている層に届けたい情報を整理することでコンテンツを作り上げた。また、サイトデザインは、学長やユニークな研究を行っている数名の教員にインタビューを行い、大学の戦略やビジョンを正確かつ明快に表現できるようなデザインで設計を行った。</p> <p>このようにサイトデザイン、コンテンツ内容とも従来のサイト構築とは全く異なった観点から行い、今年3月にリニューアルオープンができた。アクセス数は昨年よりも増加しており、国外への情報発信強化に大きな役割を果たすとともに、ビジョンの達成に向けて大きく貢献できたと言える。</p>  |
| 附属小学校<br>代表者:山崎 健                             |    | 22 | 附属学校部 部長、校長<br>ほか20名の教諭 | <p>附属小学校では、「国際的視野をもち未来を切り拓く『グローバルキャリア人』としての基本的な資質を育成する」ことを教育目標に活動展開している。</p> <p>平成24年度から、「AUSプログラム」としてオーストラリア・クインズランド州立アイアンサイド校との交流により、現地校へは5、6年生児童30名規模で訪問し、また、アイアンサイド校生徒の来日受入とを隔年ごとに行い国際交流を実体験させている。</p> <p>また、今年度10月には神戸大学国際部の助力も得て新たに開発したフランスの在マルセイユ総領事館、ホノレ・ド・ミーエ高校と提携による「MRSプログラム」を実施予定で、来年度からは、神戸大学のハワイ・ホノルル拠点を活用し、現地校と交流する「HOKUプログラム」の準備を進めており、これらを「附属小学校GCP(Global Challenge Program)」として編成し実施する予定である。</p> <p>これらの活動は、学問の発展、人類の幸福、地球環境の保全及び世界の平和に貢献するために、国際的に卓越した教育を提供することを基本理念とし、普遍的価値を有する「知」を創造するとともに、人間性豊かなグローバル人材の育成をめざす神戸大学の教育を、初等教育段階から具現化していこうとするものであり、神戸大学の機能強化のコンセプトに沿うものである。</p>  |